李嵩
註解 改正月令博物筌 十月部 二

5
529
14

十月之部目録

△印ハ俳諧の季をとり物なり

十月 卦用支 謝子 陰陽生 十月異名八九二註

△大雪 十一
△冬至 十一
△冬至賀 十二
△献履襪 △履長賀 △襪奉る 十四
△赤小豆粥食ふ 十四
△陽嘉節 十三
△冬至 十五
△朔旦冬至 十五
△相嘗祭 十五
△吹革祭 十六
△鉢叩 △暁鉢叩 十七
△平川祭 十七
△筑前宗像祭 十六
△空也忌 十七
△暦奏 十五
△五節帳臺試 △五節舞 △帳臺の試 十六

日令

朔日 上卯 十三日 十三日 朔日 朔日 上卯 八日 十三日 上酉 中亡日

○春日祭 ○大原野祭 ○國かゝ神祭 ○杜本祭 ○當麻祭 ○當宗祭 ○日吉祭 ○京都新玉津島御火焼 ○吉田祭 ○山科祭 ○平野祭 ○梅宮祭 ○中山祭 ○松尾祭

十月 日録

中寅 殿上淵酔 九十

中寅 鎮魂祭 九十

中卯 童女御覽 九十

中辰 豐明節會 九十

中寅 將使 九十

中寅 新嘗會 新嘗祭 九十

中酉 伊豆三島大明神祭 酉の市 十十

中酉 日蔭鬘 日かけの鬘 十十

小忌衣 山藍神 小忌神 十十

甲子 子祭 甲子祭 子燈心 十十

中申 近江吉臨時祭 十十

掛鳥 鳥かけ 十十

北八日 後日能 十十

北八日 都京宇賀祭 十十

月令

御火焼 十十

庭燎 十十

北七日 南都御祭 春日御祭 十十

北四日 大師講 智惠講 十十

十六日 大坂道隆神祭 十十

北八日 親鸞上人忌 親鸞講 十十

下酉 都京加茂臨時祭 北祭 十十

神樂 三條御神楽 山神楽 里神楽 十十

神樂哥 神楽哥 十十

△千歳 △早苗 △吉々利々星 △得錢子 △木綿作 △月立 △朝倉 △其駒 △寵殿哥 △酒殿哥 十十

阿知女 十十

△採物歌 榊 幣 杖 篠 弓 劔 十十

△抄 △片折 △鉾 十十

△諸拳 △葛 十十

大前張 小前張 大前張哥の名 宮人 木綿美 難波潟 前張 階太最 井奈野 脇母古 小前張哥の名 磯等 篠波 薩槻 総角 大宮 溪田 蓋 十十

△韓神詣 十十

△山神祭 十十

△暦賞 十十

△髮置 十十

△袴著 袴初 帶解 十十

△顔見世足揃 かぶき足揃 十十

△歌舞妓顔見世 顔見世 顔見世手拭 十十

△網貫 十十

△雪車 十十

△櫟 かしき 十十

△雪竿 十十

△雪垣 十十

△雪谷 十十

時令

△雪作 十十

△雪吹 十十

△ぬぐきたふれ 十十

△はつゆき雪 冬
△雪華紀 冬
△もち雪 冬
△雪轉 △雪まろび △雪まろけ 冬
△雪佛 △雪達磨 △雪布袋 △雪獅子 △雪兒 冬
△深雪 冬
△雪女 冬
△雪やけ 冬
△雪明 冬
△氷柱 △垂氷 △銀竹 冬
△霙 冬
△鐘ずめる 冬

草木

▲新生姜 △生姜漬 冬
△太山櫨 冬
△冬至梅 冬

生類

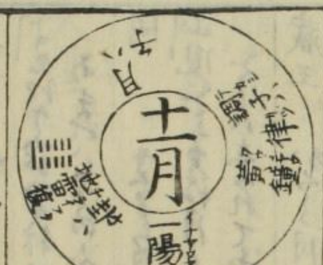
△寒苦鳥 冬
△杜父魚 冬
△鮴 冬

飲食

△新干蕪 △干大根 △干菜鈎 △澤庵漬 △干菜鈎
△干ぐぐり鈎 △うけ菜 △青干菜 冬
△あぐまき酒 △ぐぐり酒

十一月之部

△印ハ俳諧の季をもつ物かゝり



十月ハ六陰生じて陰き
ハまり當月
中冬至より
一陽来復ゝ
かり

○調子ハ黄鐘とハ子の律といふ
ゝ月令の注よゝり

○卦ハ地雷復ハ月令ハ雷をなゝ声を
發し有て陰氣ハ陽氣をかくむる事
ゝ〻ハざる故ふ声を發るのむゝ〻〻

十一月 異名 △仲冬。周正△復月△一陽。天晋月。暢月。辜月△冬半

和名 △雪見月△子の月△かゝら月△霜降月△霜月。かゝき月△霜ゝり月。雪まち月

異名註 △仲冬ハ禮記に出冬ゝのうふゝとゝ事ゝ△周正ハ碁経日周の世の

正月ハ始てる月ゝと有ゝ復月ハ蘇要
一陽来復する月なるゝゝ天正月
も周の正月と同ト義なるゝ暢月
ハ禮記の註ゝ陽久しく屈して後ゝ
暢ずゝ暢月といふと行りゝ幸
月ハ同昏註ゝ幸を克なりと有て
萬物ゝく克るといふ義なるゝ陽
ゝ一陽来復する同じへ名づく

(哥) 秘蔵 霜ゝる月
つゆゝるゝれとつきの光を孤きは
物ゝ多けれゝなりゝゝる

莫傳 なきき月
よゝれて人かつる神時の神酒月
あまれハゝくの今やおくらん

同 雪まち月
正風を待月とゝい多まう
ゝとハ志られてふゝぬゝりゝ式

蔵王 かゝゝ月
ゝゝすきそよものゝ人花の神米月
なけさゝとえれ者のけやなき

同 雪見月
ゝりつる雪のゝゝに雪見月
今朝ゝそのゝるゝゝえけゝ

(排) 霜月の月ハ候をつきもせず 湖春

(狂) 霜月ときけゝもゝ雪見月
ゆきゝもゝりにちゝ月ゝふ 野坡

大雪 節の巻。七十二候。艸木七十二候。
昼夜長短。日の出入等左ゝ記ス

十月の節
を大雪と
いふ雨が
寒氣
ふるゝ
かゝまり
て雪と
なる月
也大雪と
いふ

○鶉且ハ雉ゝ似て色黄黑夜鳴て
且を求る鳥なれハ求且鳥ともいふ

○雀一花の事本草ゝも見えず
いまゝゝつまびらかならゝ○虎始交ハ

禮記の注に虎ハ陰物なるゆへ陽の生もるゝを感じて交るとゝ〻る○枇杷蘆

ゆゝとハ枇杷の花をべの出る〻○梅枝出

とハ涸をゆゝとゝるの陽氣とゝりふのび

出る〻○松柏秀と〻冬木でぬ松柏おれ

ども陽氣ふりよゝされていよく秀る〻

節の養生

今月補藥を呑むべし

尤大熱の藥を服に

堪つらゝ又東南賊邪の風をゆ

ゝむべし是を把ては病を生ず

冬至

中の冬〻○七十二候○艸木七十二候○

晝夜長短○日の出入等尤小記

節より十六日めを冬至とゝゝ

今日八日至て夜更

ゝ長ゝ〻

事文類聚ゝ

至る三三

義あり

三極陰の

至り二二

陽氣初め

て至る三八日

輪南に至る故に

至と名づく

○蚯蚓結ハ禮記の注に蚯蚓ハ正陽の氣に

感じて後に出るゆへ今少しの陽氣生ず

るゆゝ〻ゝ〻ゝとゝしてのひぬかゝちを

云〻○蜂蝶蟄蝶も蜂もいまだ土を出さゝ

○麋角解一陽殺るゆへ麋の角あ

れと落る〻○剪綵時新も日永ゝれる

ゆへ婦人の手業も一線ゝゝ長ゆへ剪

綵の新きも出来る〻剪綵きれ細工の事〻○水

泉動陽下に生る故水なる水も泉もゝゝき初る

○花信風至諸菜の花を催す風ゝゝ吹至る〻

冬至賀

聖武天皇神龜二年十一月天皇大安殿に出御有

て冬至の賀辭を受る云云續日本紀

朔旦冬至の事ハ朔日の條に あり

冬至の日ハ一陽来復する故に陽嘉節

とゝ〻。唐ゝ今日ハ在京の寅人朝服を

着し泰内拜賀と。上ハ王侯より下

民間ゝゝゝ迄酒宴を設ゝ祝ふゝ

哥 一とせふ君ゝよひのゝゝ代こゝく

いとゝゝき日のかきりはゝゝん 為真

(俳)老医若の浦るう安冬を寒る 順川
下ゆる花も花をよ 捨る冬を玉ゆ 柳居

(詩)冬至五字對句

夜向三更静　一陽方動處
ヨハ夜ナカニ近ウシテモノシヅカナリ　一陽ノ氣ガソロクウゴクトコロニ

愁添一線長　萬物始生時
物オモヒハ糸スジホドナガウナツタ日ニイヨクヽサル　ヨロヅノ物ガハジメテキザストキジヤ

同上

(詩)冬至七字對句

岸容待臘將舒柳　鐘初動
河岸ニ臘月ラヤツチ井ルヤウナケシキハソロくヒカル柳ジヤ　カネノオトモ初メテウナリ

山意衝寒欲放梅　日正融
山ノヤウスガ寒氣ヲヲソレズツキケルヤウナハ岡カウトスル梅ガアルユヘジヤ　日カゲモタイシノドカニナツタ

詩　冬至詞　方巨山

至日観書不幾行　梅梢横月
エニ月カゲヲヨコタヘテタツガレニナラフトスルハヤダ日ノミジカイユヘジヤ

漢宮紅影無人見　赤心留添一線長
官女タチカホイ〜ネテ日カカハノフタレモ見ル人ハナイカ〜タミアイトヒトスギホドモ日ノ長サガフタヤウニハニエズ

冬至故事

献履襪
履長賀ハ履奉　襪を奉る

唐土の婦人冬至の日履と襪と舅姑ゑうてまつる是長至と踐の義ゝ

魏の曹植ゥ冬至ゥ襪を献ずる表ゥ曰冬至ゥ履を献ずるハ長きを履そまへと賀をる事なるはし淵鑑類函ゥ見ゑ〜〜

律管灰飛

冬至の日室中に慢をはまつくへを置其方位ゥ堤て律管ゥ葭の灰をこめ行くなり氣至れバ管の内ゥ灰飛さる後漢書

赤小豆粥食ふ

共工氏の子不肖して冬至の日疫鬼となる平生赤小豆を畏くれバ今日赤小豆粥を食して

ちまたに流れ出づ〳〵歳時記に出づ〳〵

冬至 **神農祭** 唐土の人炎帝と号し百草をなめて藥を初めさだめ医道の祖神故今日医師祭つることなれど此月田の神を祭る事并神農の事委しく日本歳時記に出づ〳〵

冬至 **天氣** 冬至より六日目なる雨は晴ふそし雲〳〵もそくなり北〳〵風をそく星々ちら〳〵と見ゆる雨のあがるもの〳〵

冬至 **占候** 冬至より北の方に青き雲なれば来年大よし雲なきはあしくあるきに氣あれバひて〳〵黒きは水に白きは疫病〳〵赤る黄なるは火災あり但し五穀田畑よかれ〳〵。天晴まて暖なれは来年麥よし冬至の後壬の日あるはひでり多し二日より壬の日なれば旱もくるし四日小雨なれば豊年に六日よりあるはば大水なるべし九日おなじくなれば麥作よしし十日よりのちは五穀よし〳〵といつて海はいるがるに〳〵

冬至 **養生** 冬至より八陽生して日々に陽氣生ずる時あれば内を安く坐してみだりに他行せず〳〵今日房事を慎むべし冬至前後婚禮をべし〳〵尚又養生詩。故事。妙術委しく日本歳時記に出

日令

此部は十二月日ごとに定つる事并に支の定つる事を出す

朔日 今日世俗小豆飯を喰ふ〳〵ことは李時珍の説に出づ

今日冬至に當る時は上下とも祝ふべし冬至より〳〵も今日は小豆飯又は小豆餅を喰ひて祝ふべし且は唐の共工氏の故事に准ずるなり共工氏の事は四丁メ赤小豆粥の処よりの〇今日枸杞わく湯あみすれば不老

朔日　**朔旦冬至**　今日冬至小當る事をいふなり。まれに小朔旦冬至とゝのゝ時ハ日出度祥瑞もつるふ。よりて天子南殿ゝ出御ありて節會行ハるゝ群臣賀表を奉るとゝや。委しくハ天文博士ゝ尋ねきかるべし。

朔日　**暦奏**　今日明年の暦を天子へ奉るをゝ主上南殿ゝ出御ありて是を御覽ある暦乃もじまりハ欽明天皇十四年百濟の博士が奉るゝ也。江次第日本紀等ニ出

卯　**暦奏**　老の厳を盛をかしこ陽り半窓

五日　**大**○住吉新嘗祭。今年の新米を阪神ゝ奉る事ゝ餘式あり。七日のあり

二日　**京**○永觀律師忌。東山禪林寺永都観堂の開基ゝ天永二年今日寂ス

上卯　**相嘗祭**　相嘗ゝハ神ゝ相共ふきこしめさるゝ義ゝ相嘗とゝきゝくアイム〳〵と讀む。今日天皇正神殿ゝ御幸ありて勅ありて三輪。住吉。熊野。熱田。廣田。生駒。降鉾。大和。津島の大社を祭る其國の国司ゝ命じて其国の宮倉の初米を供ぜらるゝ先代旧事記ニ出

○延喜式ゝ曰相嘗祭の神七十一坐有とゝのり。近頃ハ絶ゝり。近事根元ニ出

上卯前　**筑前宗像祭**　筑前国宗像郡祭神三座延喜式ニ出

○神體ハ素盞烏のうゝとうひし三女ゝ田心姫。湍津姫。市杵島姫日本紀ニ出

○一説ゝ大和山城ゝも宗像の社ありアヒいづまゝ同躰の社ゝ

八日　**吹革祭**　爐鞴ゝも書。鍛工稲荷を祭る也事三條小鍛冶ゝ始る。昔後鳥羽院太刀カを〻くせゝふ事ゝ好ゝもせゝるゝ時の名工ゝも禁裏〳〵めされ十二月ふわりて其月々ゝ番かちさゝくゝ人ゝ是ゝ其時ハまゝ山の土を取ゝ用ひゝる故彼鍛冶ゝも度々往來

していろう山の神を拜ぜしよう
ついよいろうを祭る事とあれど
(俳)はるくさ吸草紫の白さい　北枝
吸草紫猶を休む藜田口　酉陽
(狂)ろうろうと風吾てふいろの象形
面白くこそ思ひたんぬるかちた　船史

九日　京○貫敝結神十京○五條天神
都　御火燒　日都　御火燒

十一日　○今日五加湯を浴とべし
○今日脊を灸ちる事を忌む

十一日　○京○栗田口神明御火燒あり
○花園院御忌日之京妙心寺ふ

十三日　空也忌　空也堂京四條坊門堀川ゟ有之極樂院とも
○空也上人ハ延喜帝第二の皇子おて
わてゝせゝふゞ出家をゝげ天錦三年
九月十日奥州會津ゟて往生しゝ
京都よゝ東國へ趣きあゝ六十月十日
なり御遺言ふより東国へ趣ゝ
日を御忌日とゝ毎年今日歡喜踊と

躍の念佛を修行を坊中の衆俗體
のゝけ元ゟ平定盛出家とゝ
故事委しくゝ神佛祭礼記ふ出もおもし
(俳)逝きしりて空也茶偈を髮　雪山

十三日　鉢叩　○曉鉢叩。空也堂の僧今
日ゟ四十八日の間洛中洛
外の火葬場を巡りゝ瓢箪鉢
たゝきゝ高声ゟ念佛和讃等を
唱ふ昔ハ鉢をたゝきゝるゝ
(哥)職人盡哥合
ゝ
ゝ
(俳)御たゝき出をむる扨ゝ笑ひ教　支考
我門を叩き給ふ御たゝき　左橘
(狂)ゝ
髮を出ゝ
ゝれハ芋ゝ作ゝ
ゝ
ゝ

十三日　京都　新玉津嶋御火燒　松原通ゟ有祭神長

通姫ゝ足利尊氏靈夢ゟよりて
五条俊成卿の屋敷地ゟ此祠を

して即經賢法印を別當とし後
世ハ季吟又其男代々守るといへり

十三日 大阪 ○三津八幡宮御火焼
○天王寺佛名會 音樂有り

上酉日 大和 △率川祭 率川社ハ奈良の子守町に有 開化天皇此地
にて四月九日崩じ玉ふ陵あり 祭神開化
天皇。子守神。住吉の神と三坐之季寄
の書に此祭年に両度有とあれバ祭ハ
此月ぞかり出ぬ。按に此祭四月に行ふを三
枝祭とて此月の祭を率川とするなるべし
○此祭ハ春日祭のあくる日行る神祇
令にのせる三枝祭と同じかる多くハ
四月にあるべしと 公事根元に出
又三枝祭ハ率川をいふと 神祇令に出
三枝とハさいくさとてさゝゆりをいふとも
○顯昭の説に三枝とハからもゝを扇なり
末廣なれバ祝ひやうといへり 尚四月四十一丁に見る

十四日 春日祭
中子 大原野祭
上酉 園韓神祭
右の祭り春二月と當月とあり

中申 日吉祭 近江の国日吉山王祭なり 四月厳重の祭礼あり
十四日 杜本祭
中申 吉田祭
上卯 梅宮祭
十四日 當麻祭
上巳 山科祭
上卯 中山祭
上卯 當宗祭
上申 平野祭
上卯 松尾祭
右の祭當月と四月と両度なり
俳にハ初めを用ゆるゆへ四月とし冬の
景物ひとつぐ此月ならざる季吟翁
も句躰なようて季を定むといへる

十五日 ○大阪の今宮の社御火焼
○諸国八幡御火焼有

中丑日 △五節帳臺試 △五節の舞 △帳臺の試
舞姫五人なり はじめの儀式あり
天子帳臺に出御ありて御直衣
に御指貫まくく御沓をぬがれ
清見原天皇の制し玉ひし事と
いへり 天皇吉野宮に琴を弾き
玉ひし時むかふの山に雲おこり神女

天降りて天皇の曲に應して五度袖をかへして舞けるよりて五節と名つく。清見原天皇御宇に唐土より崑崙山の玉を五つまつらせ玉へりと其玉闇をてらす事一の玉の光り遠く五十両の車に至る是を豊の明りといふ天皇よしの川にあそびして御心をなぐさめし琴を弾じ給ひしに神女空より下りて廻雪の袖をひるがへし侍れども天くらくして見へざりけるハかの玉を出して仙女のかたちを御覧じ給ると云こ 源平盛衰記出

此説信じがたけれども哥によりて玉と讀るハよる所あるに似たり

(哥) をとめこもをとめさびすもから玉をたもとにまきてをとめさびすも

古今 天つ風雲のかよひ路吹とぢよ乙女のすがたしばしとゞめん よしみね 宗貞

續後撰 月さゆる雲井の雪のかに おとめの袖もひかりそへつゝ 実雄

中 寅 △殿上淵醉 此日五節もて公卿朗詠今やうあそびたはぶれ其後乱舞にうつり次第に杳紙をきらく北の陣をめぐり五節所よつかり又取々に擬歎あるとて哥をうたひ舞ふ事也此事正月二日三日にも有淵酔ハふるく酒に醉といふ事へ 北山抄に

(非) 肩脱の袖に物追ひや殿上人 李吟

中 寅 △狩使 今日五節所に給ハせる雉子を交野へ狩せに遣ハさるゝ使をいふ也

(哥) 霜月に降ぬるのはらのけさみゆきかくみかくれ交野に今も狩しつ 俊頼

(非) 冬の跡に烝々ゑし狩使 嵐雪

(狂) 貧乏の精れつらひハ霜月のとうくかからまうひ身のうへ 信海

中 寅 △鎮魂祭 人の魂魄のうかるゝをゆきとめて身の中に志づまらしむる爲れ祭之神武天皇元年十一月宇麻志麻治命瑞寶を

つんで帝后のゝ為祭らる是はじめゝ此神八座宮内省よりあるとし式秀吉公の時吉田山ゝ遷し奉る

(俳) 魂を几巾ゝ為るゝ天川

中 卯 △新嘗會 △新嘗祭ともいふ ○其年の新穀の初穂を神ゝ奉らせゝふゝ天子御代初めゝ行はるゝを大嘗會といい年毎ゝ行はるゝを新嘗會と云用明天皇二年四月より此事始る神代豊受日天照太神當新嘗と見へれば是八祖代より有事ゝや

(俳) 打ゝひく琴の音しゝ新嘗會 白羽

(哥) 禪林七百首 琴弓はれば林のすゝもとうちよせてゝかゝるむとしゝ八 御製

中 卯 △童女御覽 清涼殿ゝ童女を召して天子御覽ゝ為る是八五節の舞ゝつきそふる事ゝ

(俳) そゝ八の何を清涼殿 月淡

中 辰 △豊明節會 前日神ゝ供しゝる新穀を今日天子ゝ進ぜ臣下ゝ給ふゝ故節會行はるゝ

(俳) 彼れも清涼殿の昔ゝ為る 李坡

(哥) さゝ〻くしのかさゝ日影かすゝのかゝる雲のそむゝ恵しゝ紀 為家

△日蔭鬘 △日かげの糸 △心葉 △日かげのうつゝ又次の小忌衣八大嘗會豊明ゝ用ひゝるゝかのかゝ。日かげの鬘八蘿まゝ女蘿まゝ下り苔といふ俗ゝ抵のゝせといふ物を冠ゝ曲るゝかゝり又日蔭の物をとゝて曲るゝといへども日かげ八此鬘を曲るゝ日の光ゝ為ゝまぶゝきを萬つ料ゝあり。日かげの糸八近代鬘ゝかゝりに白糸青糸を組て曲るゝ。心葉八冠の巾子ゝ造花をつゝるゝかゝり今八金紙まゝ白紙ゝかゝり心葉ゝ料ゝとゝ八ゝあり

(哥) 續古今 ゝゝ物のふゝその物ゝ日かげ物いつの世ゝよりゝかけはゝめゝん

(俳) 春門や公家ゝ日蔭の糸も添ひ 其角

小忌衣

△山藍袖。△小忌神。是八豊の明に暮する装束おてけれを忌と云心。今日神樂の役に當て小忌の殿上人とらに小忌衣の色八白き布を春州又八島名に山藍おてもりつけるゑ

哥　ムラ白なきものの日かけるみくまのゝ人　俊成女

俳　雲のゝくよりれもりし小忌衣　宗因

三嶋大明神祭

中伊豆

△西の市。祭神大山祇命。祭禮の日諸国より商人来りて諸の物を商ふ是を三島西の市といふて季ゝゝ。蝕因法師西しの哥當社へ奉りしし事なり

哥　天の川苗代あるせきゝゝを　蝕因

あまくりまれ神ゐゝ八神

俳　あるし八神おゐゝん西の市　麥水

子祭

甲子

△甲子祭△子燈心。當月子の月故子の日に大黒を祭る人世俗に大黒八鼠とつゝゝと

左ゐふといつり二股大根黒米黒豆なとを供へ子の日祭をなゝん月毎甲子に八祭るゝ此月八子ゝ月故甲子に祭るゝゝ初の子の日を祭

○此月子ゝ日燈心を貯ゆれ八大に福あり子祭子燈心の事委く歳時記拾遺に論あり面白き事ゝ見るべし

俳　子祭りやゝ大豆に白大根　鬼貫

狂　清よきけ八果報八子祝ひ大ゝてもよゝ　貞柳

道陸神祭

十六日　大阪

△俗に泥こぐと祭るとゝふなり天王寺村合法寺の辺に小さき石佛あり此石佛の顔に米のとゝあり供物を供へ笛に篠笛と囃して踊る是を道陸神祭といふ此祭の三日前より村中ゝ童出て往来の人に供物料をもふゝ巻くゝ八繩に泥をぬりて人を巻くゝむ

俳　道陸神の中に出る芝居　玉芝

(狂)きくるゑ々ゑ乳ゑりとえへて乃ほ祢
くゑり繩すもゑまれゑり　才流

十六日 ○諸国神明宮御火焼
○大阪座戸宮御火焼

中甲 江近 日吉臨時祭 此祭ハ建暦三年十月十八日
勅使を立て臨時ハ祭禮行ハ
れるよう初る今ハ中の申日ゝ

十八日 京○御靈の御火焼

十一日 ○雲居寺浄蔵の忌日なり

十三日 ○今日遠方へ行く事なられ病人ハ
見舞事なられ子の年の者ハ慎べし

十四日 大師講 智恵粥 ○天台宗の祖
唐の智者大師 今日
寂に依て天台の諸寺ハ十日より今
日まで大師講を修行を比叡山日光
山等ハ十八日より十三日朝まで昼夜法門
有是を論義といふ民間ハ今日小豆粥
柿柴を折て箸とす是を智恵粥といふ
(俳)智恵粥何の宗なるも争ハず　乙由

十六日 南都 ○春日若宮霜祭又御祭霜催
ともいふ今日奥福寺の僧頭屋
田楽にて長谷川黨神前ハ泰詣
て野大刀を携へ馬を牽是を遍照
院の度とりくゝ今夜亥の刻過若宮神
明の燈火をけし闇中ハ神體を御
旅所へ遷し其後火を上け歌樂等有
(俳)ほ祭きゝてゝるやゆを刀徙　如来

掛鳥 鳥かけ ○春日御祭ニて
鳥獸を贄とするをいふ
雉羽兎狸等なり十一日より十五日
ほぐく春日の神宮此獸を改む是
を獸改めといふ
(俳)掛ものゝ郎ゑ猟師の弓鉄砲　静夜

十七日 南都 御祭 春日若宮の祭なり
若宮の御旅所ハ春日の安宮と
をりゝ常ハ宮もなく芝原なり
今日の御祭うまいかりれ御殿を
營ミ若宮を渡御なし奉る安

年八月十日に此あり御殿の材
木は大和国中より所をえく
例式のごとく木を伐出し春日
へ奉る九月朔日御縄棟の式例
あり當月廿日わか神殿の造營
は廿六日の夜御旅所へ神幸な
る厳重の儀式あり闕白殿下
より騎馬の伶人はつかいはる
これは日使とり上御祭は崇德院
の御宇より始るしるし

(哥)
きたるとしやまつるまつりは月も秋
をくれ月も秋なるらん

(俳)
秋さめを暮てかく咲や菊 来山

八月廿日 後日舩 今日春日の舩は祭禮の後故よりなづく

八月廿日 親鸞上人忌 報恩講 高宗の宗祖親鸞上人
八弘長二年十一月廿八日に寂に壽
九十歳なり故に廿二日より今日迄
報恩講を修行に俗御霜月と云
(俳)
すゑこゆぬかしらのつまるほどの月 秀頌

北京日都 宇賀祭 京九條に有此所の東西の辻に宇賀
のせくといふ倉稲魂神祭は博物鑒に
(俳)
牧めてとらひま附の宇賀祭 山友

下京酉都 加茂臨時祭 北祭ともいふ
此祭は寛平元
年十月より初る。かざしに花城
とりて次第にこれを献じて使舞
にはしりまむ式あり清涼殿に出
御あるべく行はるべきなり

(哥)
夫木
神山のみてしろにはかけえへく
大えんのかきれふちかも

(俳)
冠をきしれぬとうてふ 瓢山

季經

月令

此部は八月より
十二月一ヶ月の事をしるす

御火焼 此月所々の神社にて火を焼湯を奉る是は神樂

庭燎の余風なるべし夫くて社まで行ひ奉る日違へりゐる〜まし前くの日の取る記に此月御火焼をなれば地中に ある陽氣を追出す訣歳時記拾遺より

神樂

△東三條御神樂 △山神樂 △里神樂 ○昔天照太神 岩戸かくれ〜せるひ一故世界くら やみとなりし時諸神岩戸の前に あつまり庭火をたき祈しなひなる 事有神代巻に出今神樂を行ふは 其余風なり故に行ふところの物 皆神代巻よりへる△東三條 の御神樂下の卯の日といへるは昔は 東三條重明親王の御宅なり其 辺なる両社の神有仁平三年十一 月下卯の日神樂始奉らせ給ふ 事拾芥抄其外諸書に出今は絶えり △山神樂といふは禁中内侍所にて 行ふをいふ△里神樂といふは禁 裏の外神社にて行ふをいふなり

(哥) 拾遺 触宣

あらたまのけふのもちことをもれさうつきよ
ひうけもそひく出ぬとおりくは

新古今 貫之

をくれゐるもかりくぬ紅葉ばの
かをやはへ人のとめくきうくん

雪玉 詠月前神樂

うくふなる星もひろも天の戸乃
明ゆく月のかけをるくへく

(連) ちきはや反の智こ三ゆる山 宗碩
うくふおれもおほ〜きをきさるゆ 宗養
汲海よ者いやるし神楽 紹巴

(俳) 扶桑や清士のくゆのよく鳴る 荷兮
里とうくふ墓ひりうきおのゆ 野水
神楽能まけぬいきそ扶桑の傍 支来

(狂) 人の面ふくとこ月の数こうくらよ
さえくる能もすこ紀ゆくく 為国

(哥) 天木 里神樂 入道前関白

山りくやいつくも志くぬ里神樂
こをとる素いえぬるへし

(俳)孫逸よ松まもりや里神楽　白羽

(狂)かくも火よ照らしあつる佑や店
蕾ゆろく甘い里神楽うな　金山

庭燎

神樂の時焼火。火處焼とハ
聚々社庭燎と拳るゝと神代巻出

(哥)堀川百首

天くゐる神のみをとる々ふや
庭火の烟雲とうゝん　公實

家集　詠庭火神樂　小弁

ふきくゐる庭火のまれ帝のまを
ゝもゝてや神をきくらん

(俳)糸烟子おハひとし庭燎ゆ　三惟

神樂歌

△神拵歌　△千歳　△早哥
△士口々利多星
△得錢子　△木綿作　△畫目　△弓立
△朝倉　△其駒　△竈殿哥　△酒殿哥

○右ハ神樂の時くゝふくゝし物の名ゝ
神拵哥ともいふ。千歳の哥ハせんさい
せんさいせんさいやよゝせのせんさいやまん
さいまんさいまんさいやよろゞよのまんさいや

右の外。早哥。得錢哥。酒殿哥等
か皆々一首づゝ哥有委しく補遺ふ出

○右の外左ハ記ゝ採物哥。阿知女譯
神。太前張。小前張等ハ神樂催馬樂
のくゝひ物の名ゝいづれも本ゝ記然ども
人倫種物ふハ行くゝと貞德翁いつ
た謠物名目ばかり句ふよゝて八本ふ出るゝ
くゝゞ神樂の謠物と慨ふ聞へまゝとゝ

阿知女

是も神樂の謠物の名ゝ見
し說多し委しく補遺ふ出

採物歌

△神　△帶　△杖　△榊　△弓　△鈴
△杓　△鉾　△斧　△諸葛　△葛

是ハ神樂を舞人。さゝ紀。帶。弓。葛
なゝどをまふもちて其まふとる物の事
を哥ふつくりてうゝふゝ故ふとりゝの
哥といふ。哥ハ補遺ふ委しく出ゝ

韓神謠

(哥)本ゝ三ゝ
△ゆゝくゝとう
△けゝくゝ神のかゝをき

せんやかくゝき○まハひくゝてをまふえも
ちてゝれくゝかゝれくゝくゝきせんやくゝきき

のゝまゆハ伊豆国三島ていゝ
所より出る木綿ハ紙に
ぬくる木なりそれを四手ふして
めくるとうゝ神を祭るゝから
うゝと八宮内省ようゝ韓神
二座をゝまや　梁塵愚案抄

△大前張　△小前張。是も催馬樂
の識物なり大前張の哥
七首小前張の哥九首有名目ばかりを
ふ記ハ一ゝ哥ハ哥ハ補遺ゝ出ル

大前張哥の名　△宮人　△木綿志天　△難波
潟　△前張　△階香取　△井奈野　△脇安
古　小前張哥の名　△蓆筑　△閑野　△大
宮　△礒笛　△藻波　△殖槻　△総角　△
湊田　△葉。神樂謡物催馬樂の鉄
くりく補遺ゝ出ル

△山神祭　所々山林ゝある事なり
木の上ゝ四手を切てかけ
火を焚祭るをゝふこれも庭燎の
余風なるゝ也ー

△暦賣　俳　暦賣ゝゝ男乃の
ゝきゝの花　淡水

△髪置　世俗ゝ男女とも三歳ゝ
なれハ十一月十五日又ハ吉日
を名ゝひ髪置綿ゝて。白髪綿
。松。橘の作ゝて花。末廣扇ゝ成
童のゝゝゆひきりにゆひつけ産
神ゝ奉詣をゝる祭りその日乃食
膳ゝハカナ頭ゝこゝる魚美ゝ小石
を膳のふちゝ付る是一生をんご
ゝて齒のかゝらんやうゝと祝
ふ心とゝて高貴の御方も三歳
ゝなゝ世のふゝ時ハ此御祝儀ゝ
作ゝて花を頭ゝ

哥源氏葵　髪置　はうゝ紀ゝいろ
ゝ度のゝゝふきのおひやく糸我のゝをみん

△袴着　△帯初　△帯解。紐直。民
家の男子五歳ゝなる時
ハ此月吉日を名ゝひ袴着とゝて
ゝて碁盤のゝへゝゝく上下を着る

△帳初 京にては女子七歳にて着初る大阪は女子四歳の時當月吉日を撰び着初るなり初の事は他国ふるしむりくらけきぬにて女は白きさらぬをうきて歩行しるり近頃は甚きねふりゆくを除たるを加きこのみ△帯解とりふい紐直の事 おく女子五歳まで帯をせず紐をもてむすびしが五歳の當月より帯を改むるあり○高貴の御方は五歳にて御袴着九歳の御時御紐直 臘月吉日を忌らんく行るといつり

㊐源氏 裳着 うちやつきの事 かつくまて孫ちくまるるあまれるよ

㊑袴 袴は襲にも二即長袴 素流 袴 女中の中ふ市をてく 永房

㊒いもうは扇 まちかひさのふの款んぞの 百駄

顔見世足撫

△顔見世の初る前夜役者その芝居に集りて盃をあらはす△大阪にて人足撫と云ふ

歌舞妓顔見世

△顔見世△顔見世 世手打 大坂は

て は當月役者の出交りあり此月座元をさだめ役者を一年の抱へく十日の間夜子の刻より芝居を興行して一座の役者のこゝに出て見物へ名乗をなし其後銘々得手の藝をなし役者見物へ名乗をなし時手打といふ事ゆう是は若者十人も壮人も連中くゝなへく一組とあつまめ言葉を声をく謡ふて柏子木をならし此柏子甚面白し京都の事は年中祭礼記に委く記し

㊑顔見世や嘆いさむ下邸の梢 其角

顔見世や天満祭の火見櫓 安静

顔見世や蚫舟の火ハ消りけり　凉角
顔見世や行綺を廓の里の数　周平

綱貫（三冬）
㊑緑母や太尉おとれ法師の供　雅有

雪車（三冬）
板にて四方をかこひ箱の如く作り屋根を後へ下りに拵へ北地の人ハ是にのりて雪の上を往来するハ箱雪車といふ又荷車の車なき如き形に拵へ荷物を積て雪の上を引也くも雪車といふ
○唐の轌といふ物ハ板を以て作り足にはき泥の上を歩行具也三才図会に出たり
㊊堀川百首　初雪のきふりにたくしなへらも山賤の雑人をるふのるまく
㊑山賤に死を思ふ事なきやけの跡　竹夏
のりや雪車坂は車もやらぬくと　素磬

樏（三冬）
△樏とも書　古二字ともにかんじきとよむ又かんじき　△かしき○北地の人ふかき雪の上を歩行為に藤をまるくみて輪の丸きこうんじの如く作りてはくつの上にはくろくとあや竟は光じきとも、かんじきとも云
㊑積る雪なお渕ふ噌のふむかんじき哉　素芹
㊊夫木　かしきらく越の山ちの旅をても雪にあつきぬ身をかまふと　仲正

雪沓（三冬）
華の沓尻袋の如くしくふかくひざ頭まで及ぶの也又わらにて作りたるもあり
㊑雪沓や跪て行松の雪崩せ　宗隆
㊋初雪のいてゆつくしとする沓のひもむすぶ間まとくるえなり　伊貞

雪竿（三冬）
雪深き国なとく人往来の便の為に竿を立て標とん
㊊夫木　越の山さそぶく竿のうひろなきき日数ふる雪にあまりこえへねえ　大炊御門家佐
㊑雪竿やたらら谷の今はても　五楼
ある竿や人もすくる菊の後　布門

雪垣（三冬）
雪ふかき国なおそれこぬぬようにかこひる垣なり
㊑雪垣やはなれさうの後架　李邨

時令

(三)又ハ(田)などゝ記し侍ル八十月又ハ三冬の季ニも用ゆるものゝ

雪作 北国ハ雪降をゆゑとする時かゝらば雪作り是を雪おこしと云

(俳)庶の後声ある山や雪れて　金雅

雪吹 雪風と書。雪風文字に吹をいふ

(俳)かゝ傘ハ雪さへふきぬ　市涼

ことゝていとゝ入る梅の雪吹ル　任里

ぬぎきなふれ 北地の山道ふゝくハ旅人まで雪風ハ吹たきゝて事ある所ハ北国の寒ゆゑ雪ハ人ものゝ事ハ是をもゝ

はゝれ雪 はゝれとまぐゝと五音通ずるゝまぐゝふ

ふりくる雪ふてつりくるふハゆらぐ

(俳)水のそこにふはゝれやその情　一井

(哥)夫木

ゝれ雪ハゝくゝ消ぬれゝ

せるふるゝゝゝゝん　主殿

かゝれ雪 雪ハたゝ雪。雪のゝ

(三)(十)ひゝくゝなるゝどいふ。雪ゝゝ手の平ハとるる雪ゝとゝ

雪土産 風ハ時雨と雪ゝ降ゝ

(三)通俗志曰雪のゝ日積泥雪ハ風の

ゝて吹ゝ雪ハ降ゝゝに

雪をさを山と雪ゝ雪ゝ雪ゝ山といふ

○一説ハ雪ゝ雪ゝ風の舞ハ事ゝ

小舟などハ恐ゝ風ゝ雪ゝ此風の

ゝゝ雪ゝ雪ゝ此説ゝ

ゝゝ風ゝ

きる。風の字ハ

○一説ハ雪ゝ雪ゝ

雪ゝ雪ゝ舞風の事ゝ

(哥)山家集　ゝれ舟ハ

ゝゝ西行

雪礫 雪ハ小石のゝゝ

(三)

むら雪 雪ゞ石又ハ木などへ
ふりつゝりかゝるを見立
ふる〻雪をとりかとて心うるべし

(俳)風後〻木くふまるつがるの 五原

雪轉 △雪まろばし △雪まろげ
雪中の戯まふこと〻

(俳)たゞやる猿酒やの軒ふるもまろげ千鳥
女房の力矩宿ふるこゝ〻 去来

雪佛 △雪達磨 △雪布袋 △
雪兎 △雪獅子。雪おて
佛まさハ獸の形を作るをの〻

(俳)雪佛とゆくふ丸き同ぎう郎 乙由
同よちゝ門とロもロ毎ふる兎 文学

深雪 ふうくふくつゝる雪を
ふかゝ

雪女 雪ふくつゝる時ハ陰氣凝
つゝく怪し形をなゝハ

(俳)はゝきゝれ君〻やぼむ雪女 宝庸

雪やけ 霜やけくいぶ如く極寒
の節の病〻○一説ハ病ハ
あゝ〻ゞるみゝくもおゝきをい〻雪の
ゝうといふよ同じ雪あゝ〻ゝ

雪明 麿の孫康とゝふ人學文
を好むよ家貧ふしゝく
油ゝし雪中ハ夜雪の明りおて書
をよゝついよ御史太夫といふ官ゝなる

(俳)ゝゝとても著れハ著るゝ雪ゝゝ瓦硯
かゝゝる書ハ夜ゝゝゝ角子

氷柱 垂氷軒ゝ長く(異名)△銀竹
氷筋。氷筍。簷の下れ
滿る水の氷まるゝ山中の樹梢ゝ
ゝゝつゝ八凡一抱ふも及べゝ

(哥)雪玉 ゝゝゝけ形のゝるひの初
尾死ゝゝ死ゝ姉ゝ妹ゝ松
千載 ゝれゝきねの床やあれ
ぬゝゝつゝねふゝゝこゝの池水 經房

(俳)本ゝのまふを玉てつゝぬゝつゝ正種
山のまゝつゝかゝけくゝ毒ゝ鬼貫
村の中ゝよつゝゝの音をゝ布門
枝のまゝまふつゝれゝゝ其角

霙（みぞれ）

雪と雨とまぜりて降るをいふ

（哥）夫木

「ゆふもまよふかすのくもゐ野ふかこえてかへくまうえれき雨ぞ降る」　經家

「みぞれふるそ山のかすみのくもてゆくもの名なる」　家隆

（連）水ぬるゝ三月ふみぞれの名殘ぬ　宗祇

「みぞれせ、ぬ春の雨ぬる玉ぬ　宗碩

山ゝゝみぞれとぬゝゝ春ぬ　周桂

（俳）みぞるゝ中の雨ぬ　支考

「密猟る弥ぬゝ告る霙ゝゝ　其角

ちら身いかゝそゆくゝくこそれぬ　光山

（狂）ゆけそこ行をひゝくゝ霙しうと

そそれのゆきのはゝ合るゝし　貞德

（詩）霙ノ詞

寒光帶雨山難白（サムキイロガ雨ニマジツテアルユヘ）

山ガ白クナラヌ　冷氣侵人火失紅（イカホドフツテモ）

サムサガ人ノカラダニコタヘテオコツタ火モキエン　古撒明珠跳瓦

上ハラクト二ノ玉ガヤ子ノ輕敲碎玉（ウヘニ一ブカトオモヘバ）

入窻中（一ニドウカナフヘキウテクダケタ玉ガ）

雹（あられ）

凡雹ハ皆冬ノ陽ヲ含ミテ夏ノ陰ニ伏スルナリ

（哥）萬葉集

「わくれたつ河ゝ」行系紅の江れ

茅日をあとえれとゆらぬうを

續古今　土御門院

「ゆふ雲ゝ時雨ゝまてハつれなくて

あゝゝ迄ゝ雨ゝ降る梢末れ　素

新續古今　定爲

「あゝ風山ゝ西ゝ雲ゝ風さゝく

たゝれ義ゝくゝかるのたゝ系

（詞）○ゝぐるゝ○ぐゝくゝ

音ゝむき　風ハ風ふちゝ来る。風

さゝ雨る。風ゝたゝ雨る。風さゝへ。風

ませよ　雲ハ　なびくゝゝ。

行雲。雲ゝむき　笹ハ　ゝぐゝ

○小ゝゝ系。いゝのゝさゝ系なゝど。青ゝ

おもしろきが為よまのくよふこ合せたら
竹にもれぬるしばれ霰音をかなこゝの
会に霰ふるハ○軒のきむる○霰かとふえ
○霰くだくる○霰やふる○窓うつ
○窓うちたゝきる○篠竹のうへにふる
音ぞそぞろある又ハ荻の枯葉に
あるたゆかなどよさかう　衣にハ
嵐の椎柴○山のてうらし○かしは
○ふきまよふ木のは○紅葉ふ○家ふ
板びさし○板や○山とせぬ笹ぶき
○柴の戸○庵の戸

(連) 玉霰やふれ更行く夜の夢ぬ江　宗祇
玉さゝれなつひあるあられ江　宗因

(俳) 蓑笠やわすれし雪の雲の後に　其角
雲まよふせみ霰そく日ハ玉ちらさ　沾川
あへふるあられや雲は波の音　其角

(狂) あられふる時にハ去の一夜くも
のんでいゝ命のまゝをさきうまや　貞柳
千代ふハ江のはしまきうれされぬるかれハ
音もあられのたまくふして　貞史

(詩) 雹ノ詞　林信
飛霰瀌々数十程
寒風吹面巨堪行
雨流鞋底星如沸
雪落笠簷花未成

故事 雹 蜥蜴吐

唐土の刈居中と云人遠くいふ高き頂に至るに大なる蜥蜴数百あり長さ三四尺此蜥蜴水辺に集りて各水を取る纔に口に含は即雹を吐く事弾丸の如し戯はしく地に満つ忽震雷起りて雹昏失し去る明日人来ていふに昨午市中雹大にふると云乃蜥蜴がふれわざなる所えさしるも夷堅志に出たり

(三冬) 鐘さゆる　鐘の音は霜夜にハさえきよ乃かなる

哥 ゑの尾上の藤はさらぬ春のあらぬ色をかくやおもおくらん

俳 納豆をかきまぜる藤 文慶

○鐘の聲故事冬の十二月の

狂 面白うやほもるるの下もれの月のさゆるこいふ炭なるらん 麦波

艸木

此部おハ十一月の草木をしるす

新生姜

一生姜堀 俳 立戻る色尚のこしし新生姜 湯馬

太山擬

俳 太山擬おのの菊うゑ 常艸

冬至梅

冬至前後おゝ花開く一重も八重もあり

俳 おゝ春ふる梅の香 宗因

雪に一陽ねうみ梅 竹叟

艸木。石榴。杜鵑。山椒。芙蓉。

用意 竹。芍藥。右の類こやしもべし糞八分水二分ゝ

おハ蕎麦ゝ古屋根のゝ上。葡の根へハ葡ゝ艸ちしうみてあり

○松 杉 檜 柏 桑 紅花

右の類冬至の後より種をうへ

もべし冬至前よハ艸木植べゝ

らい論亜より此月草木心得事

貯べき麦ゝ 日本歳時記小出

生類

此部おハ十一月一ヶ月の生類をあつむ

寒苦鳥

一名鶡鳴 此鳥日本

お見る事なし大竺

印度の大雪山より此鳥ありと夜

寒を苦で鳴く其声寒苦身

を責て夜明ケハ巣を作らん夜

明ケく又鳴く今日死ぬるこゝ

明日死ぬるこゝ何の故ぞ

造て無常ぞ身を安穏ぞと

鳴といふ佛經の説ぞ此心を哥ふ

哥 玉葉集 後京極

移なくなるの古山なるのの

夢ぞおもとろくくまきのな

夫木「ともしれいかの山こがらしに行へしらぬめぬ角のあり」 家隆

○平家物語小朝拜の文ふ日いつも赤よろこびつゝ五つ色を

若そのよこ[illegible]これに

ようてわりへバこそ水をもて[illegible]気

ふ[illegible]むをいふ[illegible] 俗ことり

(俳)寒若そのゝ[illegible]を松の[illegible]へ 李城

杜父魚 ごりれ降る時出る魚をいふ

魚ともいふ(俗)船砂 本草ふ出

谷川もとふ多し此魚人をみるはば口ぐちを泥の中へ入るくさるを

ふるるかぐち船の砂のぶとくを

るゆかく名づけるなり

(俳)かくこつやまもゆ終ふ[illegible]れ 朝雄

鰤

六月頃ふる時ゝをツハスと云 西国ゐてワカ十九月一尺許

のをメシロといふ十月ころ二尺許を

を八寸といふ江東ふてイタといふ

冬のゝ長としてブリと云大なるもの

三四尺ありよろこく出世魚と称して塩をくる鰤を歳暮ゝ祝儀ゝ用ゆ

(俳)千飲ゝ衣鰤ゝ[illegible]ふ[illegible]ゝ 文松

鰤ゝ[illegible]ゝ中ゝ[illegible]ゝ 其角

養生

此部ふ八十月一ヶ月要用の事養生天気食物等記ス

破軍		向方	
夜九ツ 寅ノ方	夜八ツ 卯ノ方	夜七ツ 辰ノ方	
朝六ツ 巳ノ方	朝五ツ 午ノ方	昼四ツ 未ノ方	
昼九ツ 申ノ方	昼八ツ 酉ノ方	昼七ツ 戌ノ方	
暮六ツ 亥ノ方	夜五ツ 子ノ方	夜四ツ 丑ノ方	

日刻

亥ノ日子ノ日亥ノ刻子ノ刻事をなすに用ゆべし

方角

家普請他行東南の間高ひては背月天道東南ふ行故

樂事

霜の[illegible]の神ゝ[illegible]

身ふしむ[illegible]

おぼへこど折く[illegible]の音を

炉邊ゝ聞ゝ[illegible]酒宴ふ陽

氣をうゝをくる夜むなしたゞ
此頃のゝこゝるる多ゞし

生花

山茶花　早梅　太山櫨　茶花
仏桑　雪維木　このゝ梅しハ　ゝ花

衣服

黄菊　移菊　龍膽　節

初雪衣　面白　裏紅　蒼紅梅　面紅梅　裏

天氣　こ午ゝ方の雲ハ風。風の後ハ雨。北西の風ハ久ゝしく吹事なし。朔日十九日雨風をつゝさどゝる。冬至の後の北風ハ半日一日ゝゝくやむ南風も同然ゝゝ三日南風を雨ゝちゝるゝと多ゝ

占候　雷あれバ来春米高し　虹あるバ俄ゝ大豆高し　日蝕あるバ来年大ゝ不作。夏の冷行れハ疫癘の病多し

養生　此月つゝゝ物を枕おゝ人の目を覆ゝ

まゝとゝゝ解　亀ゝの甲
ゝるものをゝゝ人の神氣を
撹ゝるゝ其外養生の法ゝゝ妄
しゝく延壽養生論ゝ出ル故ゝ略ゝ

飲食　此部ハ十二月一ヶ月の食物の類をあつめ出ル

新干蕪　(非)信吉へ初ゝしかゝゝ　ゝの甲ゝ　立圃

干大根鉤　香の物大根干ゝ　當月冬至後早く
干ゝゝゝゝゝ極寒ゝゝゝゝ
いゝゝおゝしゝ

澤庵漬製　此漬ゝゝ沢庵和尚ゝゝしめゝく
製ゝゝゝ也ゝ名づく　漬法
大根百本　塩三升　糀三升　糠一斗
右常のおゝゝゝゝ漬るゝゝし
糠内五升　熬ゝく用ゝ

干菜鉤　**干蕪鉤**　**竹菜**

青干菜 大根の葉を繩にゆゝ軒にうづゝかけて干す

ゆゝれ酒 餅米を蒸て酒とも南都の菊屋に製する物名産なり常にゆゝれとも名よりゆゝく李とゝ

みぞれ酒 あゝられ酒の少しおゝくあるものあり

用意品

当月菊の雨覆をさるべし菊の花軒くおゝろゝ所の上を切べし土地を見立く穂をうゝく作るべし

委しくハ菊品といふる本に出れ右の外青柚葉つきのまゝ久しく貯へる法まゝこハ柚餅。金柑煎し。九年母煎し其外菓物久しく貯ゆゝ當月制衣もるよしゆしの訣委しく日本歳時記茶湯料理指南抄此二本に出れ指南抄ハ茶湯會席の献立平生の料理月々ゆゝ記れ

十一月飲食並料理献立

禁物 亀 鼈 鷲 とべて甲ある物 うゝ乾物の魚 生乃非生の雞 牛菜 又火ゝ焙る肉を食ハべゝゝ

好物 雉肉九月より此月を食べし稍補あり ○雁肉 冬食ハゞゝ 委しゝ十月の部に記す

料理

汁 ねぶう

かさ・ゝゝ茶 大根まゝし

むゝる 若さゝけ・こゝゝ

たこ 菓つきゝゝ

膾 牛蒡・はぜ・ゆゝ 菓つきゝゝ

きんゝゝみよ さゝゝ・ゝゝ

ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ

ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ

ゝゝ・ゝゝ・ゝゝ

清汁（すまし） まて貝 浅草のり

かも ほうぐし

目ざし 小松菜

差味（さしみ） 鯛 霜ふり あさつき いりざけ

鯛 小さい切 大こん・うど さんをす

あまだい 小たて ささぎ・いりば

鯉・うろこなし こうり・わう風・ささび

鴨 あをかき 名んを・いりば

煮物（にもの） ひしこ むらさき

かも 冬き やまだし 根ぎ せうが

浜やき鯛 くづあん せうが

生あわびちん くづあん ささび

ぜり 玉子 ふやく

雁・あをさび 細づくり 志めぢ 了け

生鯛 干き 葱 根ぎ しろね

和會物（あへもの） 数のこ 巨 玉でまん

玉子 白も うど・石人参 きあへ

むきまぜ わらげ 日上

いか でぶり 日上

生がい 寒 きうきいも 青菜をえ

吸物（すいもの） 鮒の子 茶せん根ぎ

焼 め了て きのへ代て

鰍のまく 根ぎ小口

鰒 引皮 干ぜうり

志じて ごしみそ

精進

汁（しる） 松茸 菜付みづ

志めぢ 青菜ふく

ちり なめさけ

新さうめん やきどうね

けし菜 やきふ うど

ふき・椎茸 干菜ふさく

豚いも 皮ごぼう しめさけ

あげさん要く ごぼうせん 木のそ

清汁（すまし） 松茸 焼いて ゆの菜

はくくし ふえのさう

ちやうろぎ もづく

生ぐりうすくへぎ こやう

膾（なます） 大こん・九年・あげふ・あさ衣せ まつげ・くり・せうが・ぶす

あげ・牛房 まつげ ぜうれくき

むろし大こん まつげ あげふ

大こんろう 荒ごす ほそやなぎ たでぞ

めうが生姜 出しさけ 生あげ

あげくへ・えす 塩松よけ あ衣ぞ

差味（さしみ） こまいも・ゑさけ ふきり・くり・せうが いり酒

ぶんごうりやし
いなか糸こんにやく
ふうふけせん

あげこ・かうし
ゆば・ホムーげ
くう・えんがを

煮物

だうのいも
むつをうさ
れんこけ

大かぶら
ふをあん

ぜんさく
やきふ
あかし

大ふとへ豆
こうまん

ふさひとさ
ゆば
やこどり

しせたいも
きくこな
大根さけ

れしふとへ
大ふめと
えさいも

麦梅
ひらこんぶ
ふうろうを

和會物

えさ
黒あへ

大こん九ひき
彩のうあへ

黒くこへ
ゆりね
ふーがへ

吸物

ほうし
きくこな

ゆこさけ
こんぶ

時物

鳥

焼・鴨・ひーくひ・鹿・
あひる・小き鶴ふく

魚

張ひーこ・いこーひーこ・こどい・
あかーぶ・ふぐ・ほうさい・
ゑそ・ひを・かこ・たい・めーろ・
こい・ふな・あめれう

青物

大こん・かぶ・こかん
ふきぬき・大根十月迄